

情報システム学の新しいアプローチ

田村俊作

慶應義塾大学文学部

情報システム研究で最近提唱されている新しいアプローチについて、従来の実証主義的なアプローチに対する批判としての側面を検討した後、BurrellとMorganの観点にしたがって、これらのアプローチを比較するための枠組みを設定した。現象学を新しいアプローチの例として取り上げて、実証主義的アプローチと対比させながら、科学観や人間観、社会観において両者が根本的に異なる見方を提示していることを述べた。さらに、新しいアプローチが理論と実践において今後展開すべき方向について若干の示唆を行った。

NEW APPROACHES TO INFORMATION SYSTEMS RESEARCH

Shunsaku Tamura

Department of Library and Information Science,
Keio University

Mita, Minato-ku, Tokyo, 108 Japan

New approaches to information systems research were first introduced as critiques to the positivistic approach. This paper examines main points of these critiques, and then, sets a framework for comparing characteristics of those new approaches, using Burrell and Morgan's. Taking the phenomenological approach as an example, it tries to show illustratively how radically phenomenology differs from positivism with regard to the views on science, human, and organization. Some suggestions are made as to further directions of new approaches for the development of theory and practice.

1 はじめに

前報告「情報システム学研究の動向」で中嶋が述べているように、ヨーロッパ（IFIP TC8/WG8.2）を中心に、近年、従来とは異なる視点や概念枠組みを用いて情報システムの諸問題に取り組もうとする動きが現われてきた。例えば、IFIP TC8/WG8.2の1990年の会議では、質的研究法、grounded theory、批判理論、アクション・リサーチ、cooperative design、解釈学、記号論、activity theoryなどが「従来のアプローチに代わる選択肢alternative approaches」として挙げられ、具体的な研究事例の発表と、関連する議論が行われている¹⁾。

これらの新しいアプローチの多くは、社会科学においていわゆる実証主義のアプローチに対する批判として登場してきたものに依拠しており、従って、通常の研究に慣れ親しんだ目から見ると、わかりにくいところや理解に苦しむ点が少ない。また、一口に「新しい」と言っても、その拠って立つ基盤や、目指しているもの、特徴となるものもさまざまで、現象学や批判理論のように特定の哲学や社会理論を背景とするもの、grounded theoryのように現象と理論との間の緊密な関係づけの方法を提示するものなどが混在している。さらに、同一のアプローチをとっていると述べている場合でも、背景となる哲学の解釈や、情報システムという対象に対する適用の仕方は人によって異なるため、どのような点で「同一」のアプローチと呼べるのか、疑問に思える場合が少なくない。

以上のような理由から、新しいといわれるこれらのアプローチに接するとき、人がまず第一に受ける印象は、恐らく混沌であり、さまざまなことばや概念枠組みが提案されている中で、それらをどのように評価して、情報システムの研究やシステム担当者の実践に活かしてゆけばよいのか、戸惑うことも少なくないと思われる。そこで、本発表では、以下の3点を取り上げて論ずることにより、このような新しいアプローチについて今後さらに検討を進める際の方向づけを試みたい。

①これらの新しいアプローチがどのような点で「新しい」のか。言い替えると、従来の科学観と比べてどのような点が異なるのか。

②これらのアプローチをどのような観点で整理すればよいのか。多様なアプローチをえり分け、適切に評価するためには、どのような観点を設定すればよいのか。

③これらのアプローチは情報システムの研究やシステム担当者の実践とどのようにかわるのか。これらのアプローチをどのようにして情報システムの研究や担当者の実践に具体化すればよいのか。さらに、具体化することによって、従来とはどんな点が異なってくるのか。新しいアプローチにどんな意義があるのか。

もちろん、発表者は「新しいアプローチ」のすべてに通暁しているわけではない。そのようなことは恐らく不可能であろうし、また、あまり意味のあることとも思われない。重要なのは、分野の包括的な見取り図を描くことではなく、個々のアプローチが研究や実践のあり方をどのように変えるのかを理解することであると考える。従って、本発表の中心は、いくつかのアプローチを取り上げて、その意義を例示的に描き出すことにある。発表者が知らないアプローチの中には、ここで取り上げているものとは全く違う考え方もあると思うが、その場合でも、本発表で示唆するように、基盤となる哲学（存在論、認識論）と、それが研究や実践をどのように変えるのかを理解することから始めればよいのではないかと考えている。また、後でも折に触れて強調するが、本発表で触れるアプローチは、発表者なりに整理した一種の「理念型」であり、現実には各アプローチに属するといわれるものの中には、実に多様な考え方が含まれていることも申し添えておく。

研究や実践への具体化については、アプローチ全体に共通する大まかな方向づけを示唆することとどめた。発表者自身まだそこまでの用意がないこともあるし、細部への展開はアプローチによって異なると思われるため、具体化については後の神

沼等の発表に譲りたい。

2 実証主義批判

今日提唱されている新しいアプローチの多くは、社会科学において、伝統的な実証主義に対する批判として登場してきたものである。ここで「実証主義」とは、社会学者が研究の際に前提としている「素朴な科学観」²⁾の基盤となっている哲学のことを指している。

英国の社会学者John Hughesに従って実証主義の哲学をまとめてみる。彼によれば、実証主義の知的な起源は、科学的認識の基盤として感覚経験を据えるBaconと、数学（演繹的推論）を据えるDescartesの両者に求められる。両者の見解を統一することにより、実証主義の認識論は、主観（人々の認識）と客観（主観による経験の対象となる外界）とを分離し、科学とは理性の力を用いて客観に対する厳密な認識を得ることであるとみなす。

社会科学の分野で実証主義の考え方を最初に提唱したのはAuguste Comteである。彼は実証主義の認識論は社会現象にも当てはまると主張した。すなわち、社会現象もまた自然現象と同様の法則性を持っており、従って、社会科学は自然科学と同様の厳密な方法を適用することにより、社会現象に関する法則を得ることができる。社会学者が発見しようとしている法則は、人の自由意志を超えて人の行動を拘束するように働いているものである。HughesはComteに起源を持つこのような見解が、今日の社会学者の間で一般的な、「正統的 orthodox」な見解となっているとしている。

ここで実証主義の考え方をまとめておこう。Hughesによれば、実証主義は次のような一連の見解を含んでいる。

- ①現実とは感覚でとらえられるものの中に存在する。
- ②哲学は科学の発見を基盤とする。したがって、「経験を超えたもの」について論じる形而上学は排斥される。
- ③自然科学と社会科学は共通の論理的、方法的基盤に立つ。（もちろん、具体的な方法は対象に

よって異なる）

④事実と価値とは厳密に区別可能である。科学は事実のみに関わり、価値には関わらない。³⁾

自然科学が客観的な事物の世界を対象に、厳密な手続きによって法則性の発見につとめるように、社会科学の対象である人間や組織も客観的な存在として対象化が可能であり、社会科学の任務は、厳密な手続きによりそこに何らかの法則性を見いだすことである。さらに、このようにして対象の観察から得られた法則性は個人の主観的な価値を超えた「真理」と関わっている。

このような実証主義の考え方、あるいは、それを基盤として成立している、観察や調査による命題の検証こそが科学であるとする社会学者の「素朴な科学観」は、1960年代以降、社会学の領域を中心に、さまざまな批判を浴びることになった。批判は上記①から④の全体におよぶが、例えば、再びHughesを援用すれば、特に問題とされたのは、自然科学との対象の違いであった。自然現象と異なり、社会現象はその現象に関わる人々による意味付与によってはじめて成立している。言い替えると、社会現象の場合には、現象を成立させている、人々による意味付与を抜きにして、現象は存在していない。すると、人々の意味付与を「主観的なもの」として無視し、観察可能な「事実」に対象を限定する実証主義のアプローチには、重大な欠陥が存在することになる。

3 新しいアプローチ

実証主義に対する批判の中から、さまざまなアプローチが登場してきた。これらの新しいアプローチの多くは、実際にはこのような実証主義批判が盛んになる以前から存在していたものである。それが、批判の中で、実証主義に代わる可能性を持ったものとして、多くの社会学者に評価されるようになった。

それでは、多様なアプローチを、情報システム研究の観点から、どのように整理し検討すれば良いのだろうか。少なくとも明確にしなければなら

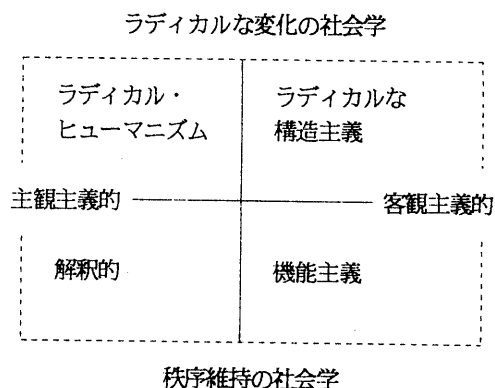
ないのは、そのアプローチが他のアプローチ、特に実証主義とどのように違うのか、という点であろう。さらに、研究が対象とする情報システムや、システムがその一部となっている組織体に関して、どのように規定しているのかも明らかにしたい。

Burrell and Morgan⁴⁾はこのように設定した検討課題に非常に良く適合した観点を提示している。彼らは組織体に関する理論を検討するための観点として、主観-客観という観点と、秩序維持-ラディカルな変化という観点とを提示している。

主観-客観という観点は、科学における対象とその認識に関わる観点で、その具体的な内容は次のようなものである。「存在論」とは対象の存在様式のことで、客観主義では対象は実在しているのに対し、主観主義では主観による意味付与を通じてのみ存在するとしている。対象の認識（認識論）に関しては、客観主義の実証主義と主観主義の反実証主義とが対比されている。人間の本性については、その環境によって決定されるとする客観主義に対し、自由意志を認める主観主義とが対比されている。方法論的には、客観主義が法則定立を目指すのに対し、主観主義は個人に対する個別的理解を重視する。このように、実証主義を含む科学観と、反実証主義的な科学観とを対比的にとらえ、その中で個々の理論を位置づけようとするのがこの観点である。

秩序維持-ラディカルな変化という観点は社会観に関わるもので、社会の統一性や秩序を重視する秩序維持の社会観と、社会構造に潜む矛盾や対立、結果として生ずるラディカルな変化の方を重視する社会観とを対比的にとらえ、両者の社会観の間に個々の理論を位置づけようとしている。

以上のような2つの観点をそれぞれ縦軸と横軸に、どのような科学観と社会観を持つかによって、BurrellとMorganは理論の基本的前提を4種類に整理し、それらを「パラダイム」と名づけた。さまざまな理論は、その前提としてどんな科学観と社会観を持っているかにより、これら4種類のパラダイムのうちのいずれかに位置づけられる。



上図のように、客観主義的な科学観と秩序維持的な社会観を持つパラダイムは「機能主義」と名づけられ、構造機能主義理論などがこの中に含まれている。客観主義的な科学観とラディカルな変化の社会観を持つパラダイムは「ラディカルな構造主義」と名づけられ、マルクス主義の諸理論などが位置づけられている。主観主義的な科学観と秩序維持的な社会観を持つパラダイムは「解釈的」と名づけられ、現象学や解釈学が含まれている。主観主義的な科学観とラディカルな変化の社会観を持つパラダイムは「ラディカル・ヒューマニズム」と名づけられ、批判理論などが位置づけられている。

BurrellとMorganはこの後で、各パラダイムごとにさまざまな理論を取り上げ、その特徴と相互の相違点を見た後、組織体に関する理論的含意を検討している。ここではその中から構造機能主義と現象学とを取り上げて、両者の違いを対比的に明らかにしてみたい。

すでに見てきたように、構造機能主義が依拠する客観主義的な科学観では、対象である社会現象は個人々の主観を超えて客観的に実在しており、従って、一定の手続きを踏むことにより厳密に分析可能である。一方、現象学では、対象が実在するかどうかについては態度を保留し（これをエポケーと呼ぶ）、むしろ対象が主観に現われてくるさまを分析しようとする。すなわち、現象学にと

全ての関心事は、社会現象を含む対象が個々人の主観によって構成されるさまである。構造機能主義においては、人間は客観的な要因によって規定され、場合によっては操作の対象となる存在であり、一方現象学においては、対象を構成しつつ生きる意味付与主体である。

組織体に対する見解でも、両者は鋭く対立する。構造機能主義では、組織体は何らかの機能を遂行するために関係づけられた人々の集まりである。一方、現象学にとっては、組織体は決して自明の存在ではなく、個々人によって共同主観的に構成されたものであり、個々人が経験においてその都度意味付与することによって初めて存在するとみなされる。

構造機能主義の研究においては、組織体やその構成員を規定する機能や要因を解明し、組織体に関する何らかの法則の定立が目指されるのに対し、現象学的研究においては、まず重要なのは、具体的な場面における個々人の主観的経験に対するその場に固有の理解であり、法則のようなものを用いる場合でも、それはこのような理解を促進することが主な目的であって、法則の定立自体が重視されているわけではない

4 研究および実践に対する含意

構造機能主義と現象学とに関する以上のような要約は、BurrellやMorganからみても余りにも単純化し過ぎた見方である。特に、組織体に関する構造機能主義的な研究は、彼らが丁寧に後づけている部分をほとんど完全に無視してしまっている。全体に、一定の観点を設定して、さまざまな見解をその観点から切り取るときには、その観点からは見えてこないものを切り落としてしまうという過度の単純化の弊は免れ難いものであろう。

むしろこのことによって発表者が意図したことは、観点を定めて異なるアプローチを見比べることによって、それらがいかに違うかを示すことであつた。実際、構造機能主義と現象学では、対象のとらえ方や重要とされることが全く異なっていた。両者は人間や組織体に対する見方が全く異な

っており、一方の見方を採用するときには、他方はまず第一には批判ないし拒絶されるべきものとしかならないように思われる。

さらに、前節で見たように、両者は異なる科学観に立脚していた。ということはすなわち、どのようなものを情報システムの研究とみなすか、研究は何を目指すべきかという研究のあり方について、両者は異なる見解を持っているということの意味する。であるとするならば、特に現象学をはじめとする新しいアプローチでは、情報システムの研究はどのようなものとなるのかを明確にすることが求められるであろう。例えば、現象学では、情報システムに関与する個々人の主観的経験に対する理解を重視するが、それが実証主義的な研究に対するアンチテーゼとなることはわかって、どのような研究として結実するのかは明確でない。IFIPでの発表⁵⁾を見ても、情報技術に対する人々の経験のあり方を論じているが、そのような知見の意義は機器の設計や担当者の研修の際に役立てられると述べるのみで、実践との関わり方に関する議論はない。この点、批判理論を標榜するNgwenyamaが実践との関わりを重視し、その方法論を展開しているのとは対照的である⁶⁾。現象学の立場からでも、例えば、情報システムに関連する諸現象を理解するための準拠枠を提示したり、あるいはシステム担当者の実践を援助するための方法論を構築することなども可能ではないだろうか。少なくとも、それぞれのアプローチは、それぞれのアプローチなりに情報システムがどうとらえられるのかを明確にすることができるはずである。これにより、情報システムに関する新たな提案がなされるときに、その理論的前提を用意したり、あるいはその理論的前提を明らかにすることが容易になる。

研究のあり方に関する検討の一環として、方法の検討がある。BurrellとMorganが論じている諸理論は、具体的な研究の方法まで示しているものではない。データの収集とか分析の技法は、研究の具体的な実践法に関わるもので、いままで論じてきたようなアプローチ（ものの見方）からは相対

的に独立している。しかし、実証主義的な研究におけるサーベイや実験のように、特定のアプローチに対する適性もまた存在する。例えば、津田は、エスノグラフィなどの質的研究方法を、現象学や批判理論に適したものとしている⁷⁾。Jonssonによれば、神沼が次に発表するアクション・リサーチも、やはり現象学や批判理論に適したものである⁸⁾。

msterdam, Elsevier, 1990. p.371-403.

1)Nissen, H.-E. et al., ed. Information Systems Research: Contemporary Approaches and Emergent Trends: Proceedings of the IFIP TC8/WG8.2 Working Conference on the Information Systems Research Arena of the 90's Challenges, Perceptions, and Alternative Approaches: Copenhagen, Denmark, 14-16 December 1990. Amsterdam, Elsevier, 1990.

2)佐和隆光 虚構と現実：社会科学の「有効性」とは何か 東京 新曜社 1984

3)Hughes, J. The Philosophy of Social Research. London, Longman, 1980

4)Burrell, G.; Morgan, G. Sociological Paradigms and Organizational Analysis. Aldershot, Gower, 1979.

5)例えば、Rathswohl, E.J. Applying Don Ihde's phenomenology of instrumentation as a framework for designing research in information science. Nissen, H.-E. et al., ed. Information Systems Research. Amsterdam, Elsevier, 1990. p.421-438.

6)Ngwenyama, O.K. The critical social theory approach to information systems. Nissen, H.-E. et al., ed. Information Systems Research. Amsterdam, Elsevier, 1990. p.267-280.

7)津田幸男 コミュニケーション研究の方法とその系譜 橋本満弘；石井敏編著 コミュニケーション論入門 東京 桐原書店 1993. p.102-125.

8)Jonsson, S. Action research. Nissen, H.-E. et al., ed. Information Systems Research. A